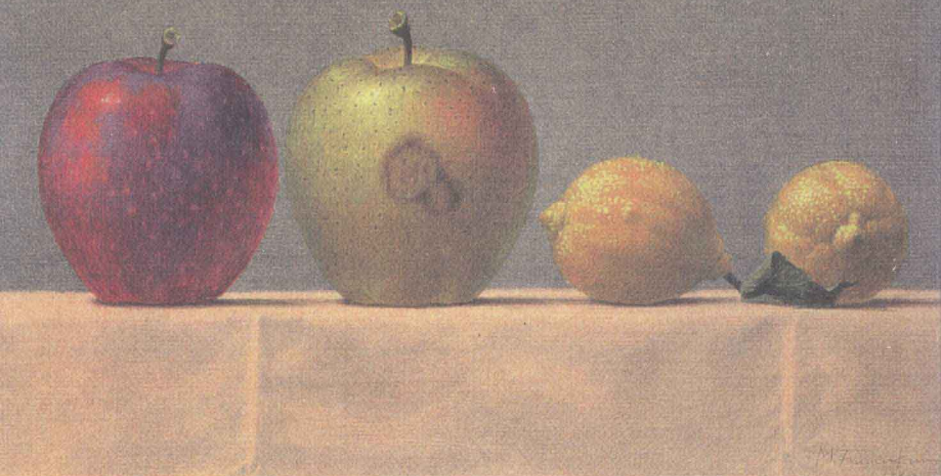


K I M U R A K I N U K O



ホスピスからの生還

木村絹子

ホスピスからの生還

◆木村絹子◆



江苏工业学院图书馆
藏书章

ホスピスからの生還

1998年7月30日 第1刷

著者———木村絹子

発行人———小畑祐三郎

〒141-8538 東京都品川区西五反田1-21-8

電話 編集部 03・5434・5112

販売部 03・5434・5012

印刷・製本—大日本印刷株式会社

©1998 K.Kimura

Printed in Japan 1998. ISBN4-87709-244-7

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、編集部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、編集部あてにお願いいたします。

KSSホームページ<http://www.kss-inc.co.jp/>

¥1500-

目次

プロローグ.....	9
------------	---

第一章 手術不可能、半年の命.....	11
---------------------	----

一つ目の癌／入院生活／教師を辞め、札幌に転居する／
二つ目の癌／検査入院／卵巣癌の疑い

第二章 藁にもすがる思いで.....	33
--------------------	----

宣告、そして退院／病の進行／
死に場所はホスピスと決めた

第三章 清瀬のホスピスへ（日記より）.....	48
-------------------------	----

中神医師との出会い／卒業文集に寄せて／
ホスピス入居／生への一筋の光明

第四章 浜松のホスピスへの転院……………77

千原医師との出会いと手術の可能性／
クリスマス会／手術へのゴーサイン

第五章 いよいよ手術……………92

小児の頭ほどの腫瘍を摘出／術後の回復、退院／
再び札幌医大に通院

第六章 浜松へ再入院……………106

海外旅行での異変／緊急帰国／腹膜への転移／
緊急手術／体調の悪化／

抗癌剤治療が始まった／不調の中での治療／
三回目の治療／脱毛と^{かつら}髪／白血球低下

第七章 一進一退の病状……………144

札幌への一時帰宅／治療延期／腸閉塞

第八章

ホスピスからの生還

腫瘍が縮まる／ホスピスで二度目の年越し／
退院までの日々

159

第九章

通院と治療の日々

二回目の脱毛／しぶとい腫瘍／治療
しながらダイエツト

173

第十章

腫瘍が消えた

抗癌剤の副作用との闘い／夫に癌の疑いが／
夫の検査入院／夫は浜松で手術を／
夫の退院と私の抗癌剤治療／腫瘍が消えた

187

第11章	三つ目の癌	212
------	-------	-----

映画三昧の日々／新たな癌が見つかる／子宮体癌

第12章	四度目の開腹手術	225
------	----------	-----

準広汎性子宮全摘／手術成功

エピローグ	238
-------	-----

あとがき	242
------	-----

装幀／代田 樊

装画／古川 幹広

ホスピスからの生還

プロローグ

「血液もまったく正常だし、胸部レントゲンもかつて胸水が溜まっていたとは思えないほどきれいなものです。普通は痕跡があるものですけどねえ」

主治医の千原医師が言った。ここは浜松市にある聖隷三方原病院。私は札幌から飛行機、新幹線を乗り継いで定期検診に通う癌患者だ。三つ目の癌の手術を受けてこの十月でやっと三年が経とうとしている。幸い、今のところは再発転移の兆候はない。

一九八六年、三十八歳の時、大腸癌の手術を受けたのが最初だった。四十二歳の時には卵巣癌手術、その三ヵ月後には腹膜に転移して三年間の抗癌剤治療を受けている。そして、一九九四年、四十六歳で三つ目の癌、子宮体癌の手術を受けた。抗癌剤治療を受けていたところから、元気なうちに自分なりに闘病の過程をまとめておかなければと考えていた。七年前、卵巣癌が発見された時は、「手術不可能、半年の命」と宣告されている。それが死を覚悟して入院した東京清瀬のホスピスで一人の医師と出会ったことにより、私の運命は大きく変わった。そこで手術の可能性が探

られ、浜松のホスピスに転院。この浜松のホスピスで、現在の主治医と出会い、不可能と言われていた卵巣癌の手術にゴーサインが出された。腹水、胸水が溜まっている中で、まさに奇跡的な手術だった。百分の一くらいの可能性だったという。手術の三ヵ月後には転移に見舞われるという不運はあったが、その後もさまざまな好運に恵まれて、三つの癌を患いながら、四十九歳になった今も元気に暮らしている。

第一章 手術不可能、半年の命

一つ目の癌

今から十一年前の一九八六年、私は当時東京で小学校の教師をしていたが二月ごろから腹部に少し異常を感じ始めていた。食後二時間くらい経ってから腹部の鈍い痛み、膨満感、横になるとお腹がゴロゴロと異様に鳴ることなどが気にかかっていたのだ。初めは便秘がひどくなったのかなと思ったが、七月半ば、排便に少し血が混じっているのを目にした。痔にしては肛門の痛みや違和感もないし、やはり一度病院に行った方が良さそうだと判断した。

しかし、間もなく学期末の忙しさに追われ、夏休みになったら行くことにしよう、と決めていた。七月二十日過ぎから夏休みに入ったが、プール当番とか、夏季施設の付き添いなどの仕事があり、なかなか行けないでいた。八月になってやっと夏休み気分を味わっていたが、今度は解放感から（いつも痛いわけじゃないし）と自分に言い訳し、一日延ばしにしていた。

八月十日過ぎ、会社の休みに入った夫と共に飛騨高山に旅行に出かけた。三日目の飛騨民俗村

を見て回っている時、何度か便意を感じトイレに通ったが、その度に出るのは血の塊だった。便も中に入っていたのかも知れないが、目につくのは鮮やかな血の色をしたものだった。これはもうほっとけない事態だと感じ、旅行から戻った翌日、杉並区の自宅近くにある河北病院で診てもらった。やはり痔ではないと診断され、たまたま派遣医として来ていた消化器外科の沖津医師に東京医科大学病院を紹介される。一週間後、新宿にある東京医大病院を訪れた。そこで注腸造影検査をし、日を置いて内視鏡検査をした。

「S字結腸のところに四センチ大のポリープが二つあります。早めに開腹手術した方がいいですね。もう少し小さければ、内視鏡にメスをセットして切除することもできたのですが……」

主治医になった沖津医師が画像を指し示しながら説明してくれた。

入院生活

九月八日、学校には一カ月の休暇届を提出し、入院した。入院後、手術に向けての検査がいろいろあり、二週間近く経った二十一日、やっと手術と決まった。私はその時、今思うと不思議なのだが、（もしかしたら癌ではないか）という疑いを持たないままに手術台上がった。当時は日記を付けていなかったもので、かなり記憶も薄れているが、術後一週間近くを回復室で過ごし、重

苦しい痛みや二十四時間続く点滴、諸々の管につながれる不快感に耐えた日々は、今でも鮮明に覚えていてる。

回復室から六人部屋の病室に移り、重湯から三分粥、五分粥と少しずつ食事もとれるようになって、徐々に体力も回復していった。六人部屋の患者同士、親しく話をするようになって、二人が肺癌患者だと知った。一人は五十代半ばの井上さん、もう一人は四十代初めの斎藤さんだった。井上さんは会社の集団検診で早期の肺癌を発見されたというが、手術は既に二回も受けていた。斎藤さんは防衛庁に勤めていた人で、私より一週間遅れて手術を受けている。彼女たちはどうやって自分の癌を知ったのだろうか。今の私なら、まずそれから聞いてみたい気がするのだが……。

ある日、斎藤さんがふつとつぶやいた。

「私なんか、タバコも吸わないし、夜遊びもしなかったし、夜も十時には寝る。品行方正そのものの生活をしていたのに、何で肺癌なんかにかか^{かか}ったのかしら」

彼女の心の内側を垣間みた思いでドキッとしたことを思い出す。また、夜中に目を覚ますと、私の隣のベッドだった斎藤さんがベッドに正座していたのも何度か目にした。気になって一度、「どうしたの。眠れないの」

と尋ねると、

「術後の背中の傷口が痛くて眠れないのよ」

と言っていた。だが、今思うと術後の痛みだけでなく、肺癌という病を抱えてしまった不安や恐れ、悲しみ、淋しさもあったのではないかと思う。私はその時自分が癌だとは思えもせず、身内や友人に癌患者がいなかったこともあって、彼女の心の痛みにまで思いを馳せることができなかった。

井上さんは抗癌剤服用による食欲のなさ、味覚の変化をよく口にしていた。

「柿やリンゴを食べても、なんか大根を食べているようで、おいしくないのよね」と嘆いていた。

私の方は術後二週間ほど経って一度軽い腸閉塞を起こし、絶飲食が一週間くらい続き、入院もその分延びたが、ほぼ順調に回復し、十月二十日過ぎ退院できた。その後、二週間に一度の定期検診と毎食後の薬の服用を義務づけられたことから、(もしかしたら、ポリープではなくて癌ではないのか)という疑いが頭をよぎるようになった。薬は二種類、黒っぽい粉末薬とカプセル二錠だった。黒っぽい粉末薬は井上さんが飲んでいたものとよく似ていた。これはクレスチンという免疫療法剤だと後で知った。この三、四年後、癌には全然効果がないと新聞で報道されている。カプセルは何だったのか今でもわからない。この二種類の薬を服用するようになって一カ月経たないうちに、手足の爪が黒ずみ始めたことも疑いを深めることになった。

十二月に入った最初の土曜日。夫が会社の同僚と行っておいしかったからと誘ってくれたレストランでワインを二、三杯飲んだ後、私は話を切り出した。